

「技能と技術」誌表紙デザイン 受賞者インタビュー

「技能と技術」編集部

1. はじめに

本誌では、例年、本誌に対する意識の高揚とデザイン教育の振興を目的とし、表紙デザインコンテストを開催しています。本コンテストは、全国の職業能力開発施設のデザイン系学科の方を対象として公募しており、応募作品の中から優秀な作品を選出しています。

本年度の表紙デザインコンテストでは、受賞者の皆さんがそれぞれの視点からテーマを捉え、個性あふれる作品を制作されました。本誌編集部では、受賞の感想や作品制作の背景、日頃の学校生活について伺うため、受賞者の皆さんと指導員の先生にインタビューを行いましたので報告します。

2. 沖縄県立具志川職業能力開発校 メディア・アート科

同校は、技能労働者を志す人たちに対し、技能の習得を支援するとともに、就業後の職業の安定や地位の向上、さらには地域社会の発展に寄与できる有能な人材を育成しています。

メディア・アート科では、デッサン、平面構成、イラスト、色彩の基本技術をはじめ、製品企画からデザイン、印刷、製本に至るまで、印刷に関する幅広い知識と技能を習得します。主にDTP制作に必要な技能として、Illustrator、Photoshop、InDesignの基礎から応用までを学ぶほか、サイン広告やWebなど商業広告に関わる技術も、演習や



沖縄県立具志川職業能力開発校の外観

公募への参加を通して身につけます。これにより、関連企業で活躍できる技術者を養成しています。

3. 受賞者インタビュー

—学校生活はいかがですか。

兼本氏 とても楽しく、充実した学校生活を送って



左から、真志喜涼雅氏、内間美月氏、
兼本典佳氏、松田幸生指導員

います。

—どのような時に充実していると感じますか。

真志喜氏 私はパソコンを持っていなかったため、Illustrator や Photoshop を学ぶ環境が整っていることをとてもありがたく感じています。機材をそろえるには費用もかかるため、こうして学ぶ機会があること自体が大きいです。

内間氏 私も同じように、機材がない中でここで学べるのが自分の力になっていると感じています。また、周りの人と意見を出し合いながら課題に取り組めることにも充実感があります。

—学生同士で意見を出し合うことも多いのですか。

内間氏 はい。課題が出るたびに、「こうしたけれど、どうしたらよいか」と相談したり、操作方法を教え合ったりしています。デザイン面でも、お互いの個性を見ながらアドバイスをし合うことがあります。

—どのような授業が楽しいですか。

兼本氏 自分の個性を出せる課題が楽しいです。印象に残っている授業の一つがスクリーン印刷で、自分でデザインしたものをTシャツに印刷するところまで体験しました。色も自分で決めて制作するので、普段なかなかできない経験だと思います。

内間氏 カッティングシートの作品制作も楽しいです。デザインしたものが実際に形になることに面白さを感じています。

真志喜氏 コンテスト応募に取り組んでいる時、一番楽しいと感じます。自分で考えたものを作品として仕上げていくことにやりがいがあります。

—この学校では、実際に活用されるものに関わる機会も多いそうですね。

松田指導員 校内で使われる掲示物のほか、カレンダーやノート、付箋など、実際に形になる制作物に関わる機会があります。デザインだけで終わらず、印刷や製本なども含めて学べる環境です。

内間氏 パソコンに向かう作業だけでなく、さまざま



内間氏（左）および兼本氏（右）実習作品



同校の各種コンテスト受賞作品



実習作品

まな機械や制作工程に触れられるのが良いです。ここでしか学べないことが多いと感じています。デザイン系を学ぶのに、この学校はとても良いと思います。

兼本氏 入学前は、座ったままの授業が多いのかなと思っていましたが、制作などもあり、楽しみながら学んでいます。デザインの仕事は限られたものだと思っていましたが、実際には印刷やグッズ制作など幅広い分野があることを知り、仕事のイメージが大きく広がりました。

真志喜氏 自分で機材をそろえたり、独学することは難しいと思ったので、この整った環境で楽しく学べることに大きな意味を感じています。

—授業や課題に加えて、公募や検定なども重なる時期は大変ではありませんか。

兼本氏 大変な時期もあります。公募の時期が重なったり、IllustratorやPhotoshopの操作に慣れていないうちは、どうしても時間がかかりました。

松田指導員 2年生になると、IllustratorやPhotoshop、色彩の検定や就職活動も重なります。限られた時間の中で、課題、公募、検定の準備を進めることになります。

—受賞された時の率直なお気持ちはいかがでしたか。

内間氏 正直、驚きました。周りにもすごい作品を作っている人が多かったので、まさか自分が選ばれるとは思っていませんでした。

兼本氏 私も、大きな賞をいただいたことがなかったので驚きました。

真志喜氏 うれしかった一方で、講評を見て「もっ

とこうすればよかった」と思う部分もありました。それでも、挑戦して良かったと思っています。

—受賞は周囲の方に伝えましたか？

内間氏 家族に伝えました。「おめでとう」と言ってくれてとても喜んでくれました。

兼本氏 家族や友人に伝えるところ、とても喜んでくれました。ホームページを見て感想を伝えてくれた人もいて、すごくうれしかったです。

—今回のテーマは「多様性」でしたが、いかがでしたか。

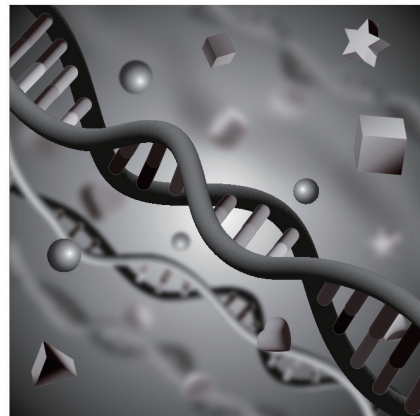
内間氏 とても難しかったです。多様性はさまざまな表現ができる言葉なので、どのようにデザインに落とし込むか悩みました。

兼本氏 言葉として意味は分かっているけど、それを図形やビジュアルで表現するのが難しかったです。

松田指導員 テーマは広く捉えすぎず、「技能と技術」という枠の中で考えるよう伝えていました。たとえば、技術の進歩によってさまざまな人が使いやすくなる道具なども、多様性の一つの形だと考えています。そのうえで、自分の考えたものに自信を持って表現してほしいと伝えました。

—作品にはそれぞれどのような思いを込めましたか。

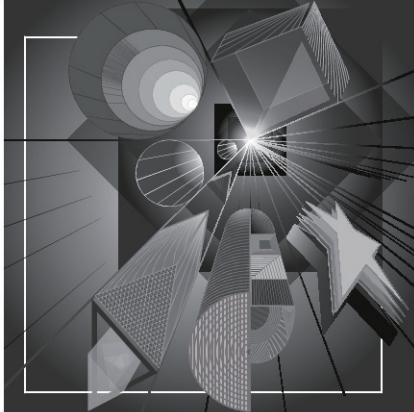
内間氏 DNAのようなモチーフを用いて、それぞれの個性が組み合わせられていくイメージを表現しま



令和8年表紙デザイン 内間氏受賞作品

した。

真志喜氏 一つの形が広がったり、変化したりしていくことで、多様性を表現しました。



令和8年表紙デザイン 真志喜氏受賞作品

兼本氏 真ん中は宇宙をイメージしています。異なる図形を一つひとつの個性として捉え、それらが互いに支え合いながら共存していく様子、人生、をデザインに込めました。



令和8年表紙デザイン 兼本氏受賞作品

—制作はどのように進めたのでしょうか。

松田指導員 課題やテーマの説明を行った後は、基本的に各自でコンセプトを考え、制作を進めました。必要に応じて声をかけましたが、考え方を決めつけたり、手順を細かく指定したりするのではなく、大まかな流れを伝えたくて、自分たちで悩み、試行錯誤してもらいました。

内間氏 教室でそれぞれが集中して制作してしまし

たが、一緒に頑張っている感じがありました。

松田指導員 競い合うというより、互いに刺激を受けながら取り組んでいたように思います。こうしたコンテストは、作品づくりの目標になるだけでなく、就職活動などでも自分の成果として生かせるものだと思います。今後の成長にもつながってほしいと考えています。

3. おわりに

今回のインタビューでは、受賞者の皆さんが、充実した学習環境の中で仲間と刺激を受け合いながら、日々の課題や公募に真摯に取り組んでいる様子うかがえました。今回のテーマ「多様性」は、表現の幅が広いからこそ難しさもあったようですが、それぞれが自分なりの視点で考え、作品として形にされていたことが印象的でした。

受賞者の皆さんの今後ますますの活躍を期待しております。お忙しい中、インタビューにご協力いただき誠にありがとうございました。

なお、現在、令和9年「技能と技術」誌の表紙デザインの募集を行っております。詳細は31ページをご覧ください。皆さまからの多数のご応募をお待ちしております。